



**ジョニー・ハイマス
(Johnny Hymas)**

写真家。1934年イギリス生まれ。66年ハリウッドにて写真を学びスタジオを開く。69年の初来日後、日本の自然の美しさに魅かれ度々来日。74年より日本に定住し、日本の自然や文化を撮り続けている。92年『JAPAN The Four Seasons』をテーマに東京、大阪で写真展を開催。著書に『JAPAN The Four Seasons』(主婦の友社)、『OPULENCE』(共著、講談社インターナショナル)など。

た。結婚してから二十年の間、ほとんど日本から外に出たことはありません。出たくないんです(笑)。日本が僕の永遠のテーマになったんです。日本の美しさ、心、伝統や原風景に魅かれ、離れられなくなっていました。この写真集のコンセプトは、八年前に思い付いたんです。

今橋 コメどころの秋田、岩手、青森、岡山のたんぼがこの写真集には載っていないのは何か理由が？

ハイマス 北海道から沖縄まで各地を撮って回るには、時間が足りませんでした。十年、十五年かければよかったのかもしれません。去年、コメ問題が話題となり、それにあわせての出版ということもありましたので――。

語りかける
本たち

Books

日本を生きる外国人② — 今橋映子の著者と語る —

「日本の心」を 追い求めて

ジョニー・ハイマス (写真家)
Johnny Hymas



『たんぼ めぐる季節の物語』
(NTT出版、1,600円)

「たんぼ」への一目惚れ

今橋 私の家では二年前から秋田県の西仙北郡の農家に頼んで、毎年何十キロものコメを送ってもらっています。たまにたまテレビで、無農薬で作るコメを消費者に直送するその方の苦労を見て大変心を打たれたからです。それ以来、コメに関心がありまして、ですから「たんぼ」(NTT出版より五月に刊行)という写真集を見たとき非常に興味を覚えて、ぜひ著者

のジョニー・ハイマスさんにおいでいただきお話を伺いたいと思つたんです。イギリス人であるハイマスさんが「たんぼ」を撮ろうとした理由とかきつけかけは何だったんですか。

ハイマス 僕は一九六九年四月にアクロバット・エンターテイナーとして日本にきました。十二月までの九カ月間、北海道から沖縄まで興行して回つたんですが、僕のショータイムはほとんど夜の八〜十時でしたので、昼間の時間を利用して、日本語に苦労しながらその土地土地

の田舎の景色を一人で見て回つたんです。この年の春から冬の初めにかけての九カ月間、日本の四季の変化を存分に楽しみました。日本の田舎のひなびた美しさ、何よりもいろんなたんぼの美しさに一目惚れしたんです。そして、そのときに一人の観光客として、たくさん写真を撮りました。

今橋 では日本にいらつしゃつたのはまったくの偶然だったわけですね。

ハイマス ええ。それから毎年日本に来て、七四年に日本の女性と結婚しまし

『たんぼ』のテーマは米作りの生活と、四季の移り変わりを追うことにありました。しかし、一口に米作りと言ってもその方法や時期は地域によって違いやズレがあり、もちろんコメの種類も違うわけです、その全体を限られた年月で撮るのは困難でした。米作りの世界を撮ったのは凶作もあつたこの二年間で、それ以前は日本人の心と故郷をテーマにして、山間に残るひなびたたんぼなどもつばら風景を追っていました。でも、二千年間の日本のコメ文化を理解するのは難しいですね。

今橋 この本に関して心残りがありますか。

ハイマス ここには、だいたい二十枚ほどの米作りの大事な写真が載っています。青森や秋田や北海道のたんぼも撮りましたが、使いませんでした。

日本が恋しい

今橋 実は、ハイマスさんの文章を読まさせていただいたとき、ラフカデー

になりませんか。

ハイマス 日本の進歩の速度はものすごい。新しいものを作ろうとする、日本人のエネルギーに感心します。それが日本独特な、まあいい面で、僕は好きです。何しろ飽きない。日本にいと頭の回転が速くなるから、ヘルシーです。もともと、物事をゆつくりと考えようとする気がなくなりました。

今橋 確かにそうですね。イギリスに帰りたいという気は起こりませんか。

ハイマス 六年前に、久し振りに帰りました。妻と子どもに僕の国を見せたいと思つたからです。一年間暮らしたんですが、その間、イギリスの風景写真の企画を立て、自分のアイデアで撮りました。ところが、半年もたたないうちに日本が恋しくなつてしまいました。

今橋 え……そうだったんですか(笑)。

ハイマス 本当に。イギリスではコミュニケーションがあまりできず、逆カルチャー・ショックを感じた次第です(笑)。日本人の習慣とか会話とかフィーリング

オ・ハーンのことを思い出しましたのですが……。

ハイマス ほかの人からもよくそう言われます。

今橋 ハーンが嘆いたように、ロマंचシズムとしての日本はすでに消えてしまつていきますね。いまも日本はどんどん変貌していますから、古きよき日本など夢物語かもしれません。ハーンは昔、「現実の日本は、変わってしまったから見たくない。過去の日本だけを見ていたい」と言つて、東京から出雲に移り住みました。そのような幻滅的な状況はずつと続いていくと思いますから、「日本の原風景」と「日本の心」を現代の日本に探すのは、難しいと思いませんか。

ハイマス 僕は時代小説を読むのが好きです。俳句も素晴らしい。江戸時代から数えて、三百年間もその伝統が続いています。なかでも、僕が一番好きなのは種田山頭火の俳句なんです。その彼の世界に僕は、一つの日本のロマンチズムを求めているのかもしれない。山頭火が生まれた明治から、戦前戦後と日本は

など何もかもが懐かしくなつて。ですから、イギリスの風景写真を仕上げるのに苦労しました。

今橋 早く日本に戻りたいと?

ハイマス ええ、精神病にかかったような気がしてつらかった。本当に。

いまはし・えいこ

筑波大学専任講師(比較文学・比較文化)。1961年東京生まれ。東京大学大学院修了。学術博士。著書に『異都憧憬 日本人のパリ』(柏書房、サントリ一学芸賞)など。



爆発的に変わってきましたが、そのあまりの進歩の激しさに、僕はこの五十年間の日本を異質なものに感じています。それが、非常に悲しい。僕はできれば、「日本の心」に触れてみたい。昔の侍の時代に生きてみたい、見てみたい。そういう思いに、嘘いつわりはありません。僕の生まれ育つたところも、原風景の残る美しい田舎町です。

今橋 イギリスのどちらにあるんですか。

ハイマス ウスター州です。風光明媚で有名なところです。ノスタルジアを駆り立てる昔の日本も、非常に素晴らしいと思います。『たんぼ』の読者は、ほとんど中年と年寄りの人ばかりです(笑)。だから読者からいただく手紙もセンチメンタルなものばかり。ノスタルジアを感じているわけですね。

今橋 確かに、そう思います。でもハイマスさんが思っているような日本は、いまおっしゃつたようにどんどん消えてしまつて……。幻滅を覚えて日本が嫌い

今橋 それじゃ、ハイマスさんは私たちよりも日本人的なんですね(笑)。

私は三年ぐらいい前、イギリスに行きました。結局一カ月間ロンドンだけの滞在でしたが、田舎の風景は素晴らしいと聞きました。ですから、ハイマスさんがイギリスよりも日本の風景に魅かれるのは意外です。

ハイマス それはちょっと別の話です……。確かにイギリスの自然と伝統風景は、まあ、昔からあまり変わっていません。日本のような激しい自然開発は少ない。しかし、開発をよそにして、日本の自然は四季の変化を映し出し素晴らしい。

日本独特の風景は、山の風景です。その美しい風景が北海道から沖縄にかけて、いたるところに見られます。木の種類も植物の種類も、実に豊富です。イギリスの自然が牧歌的なのに比べて、日本の自然は厳しい。

今橋 確かにそうですね。

ハイマス 山は高く、湖とか湿原とか、溪谷とか滝とか、変化に富んだ自然が日

本全体に散在しています。日本の観光客はそういうありのままの自然と触れたがるから、リゾート開発が進み自然破壊が起る。それにひきかえ、イギリスには昔ながらの観光地があつて、観光客はそこへ行く。イギリスには新たな観光地を作るにふさわしい場所もないが、日本では沢山ある。だから伐採が行われ、困った問題です。

ロマンチックに飾った世界を

今橋 「たんぼ」の本を見ていました、たんぼの消失とは、ただ単にたんぼがなくなるだけでではなく、その周辺に棲んでいた虫とか鳥など、いわゆる一つの生態系が消失してしまうんだという思いにとらわれました。その意味で、懐古的な風景写真集とは全く違う重要な提言を現代日本ではなさっていると思います。

それにしても、ハイマスさんが撮られた『たんぼ』の造形的な美しさは、見事です。私、写真の世界には詳しくありません。

ジャーナリズムに近いと言えるかもしれません。

今橋 ハイマスさんの『たんぼ』にはロマンチズムよりも、むしろノスタルジアを感じます。

写真家の中には白黒でしか撮らないという立場の方もいますが、ハイマスさんのこれまでの作品を見るとカラー写真はかりですね。ノスタルジアに満ちた日本を撮るには、カラーのほうがふさわしいとお考えですか。

ハイマス フォトジャーナリズムはモノクロームを使います。しかし、ロマンチックでノスタルジアに溢れたムードはカラーでなければ表現できません。日本独特の四季折々の変化を撮るには、カラーしかありません。

「神聖な土地」——「たんぼ」

今橋 たんぼの写真を撮られていたときに、これまでいろいろな方と日本の農業問題について話したり、聞いたりしてきましたと思いますが、仮にフォトジャーナ

ませんのでよくわかりませんが、ピクトリアリズムとフォトジャーナリズムという言い方があるようですね。ハイマスさんが撮られたたんぼの写真は風景の造形美を追求するという点で、ピクトリアリズムということになるんでしょうか。

ハイマス そうですね。

今橋 ハイマスさんはこれからも、ピクトリアリズムの立場からお仕事をするつもりですか。

ハイマス 僕はこの二十五年間に日本の自然はもとより、神社仏閣や仏像などさまざまな面から「日本の心」を撮ってきました。その間、僕はフォトジャーナリストとして自分を意識したことはありません。

フォトジャーナリストは被写体についてあまり考えず飾らず、その時のインパクトでありのままを撮る。フォトジャーナリズムに携わる人の目と心は素晴らしなものもありますが、概して非常に説明的な感じがします。「タイム」や「ライフ」の仕事がそうですね。そこには、アンブルとかムードとかを大事にする姿勢が少し減ります。

ハイマス 先だって、正月番組の取材で新潟県の松之山町に行ってきた。僕が一番好きなところで、これまで何度も訪れています。その農家の人たちとの間で話題になったのは、やはり後継者問題でした。子どもは三人とも都会に出て帰省せず、祖父母が亡くなったたんぼはどうなるかと悩んでおりました。

こんな話を、この八年間取材するたびに何度も聞かされてきました。コメの輸入問題よりも深刻です。日本の政府は、米作農家の保護に真剣に取り組んでいないみたいで、非常に不安を感じています。農民がかわいそうです。ですから、僕の大好きな日本の田舎を、故郷の昔ながらのたんぼを何とか残しておきたいんです。

今橋 本当にそうですね。秋田からお米を送ってもらう時に、お米と一緒に手書きの新聞のコピーが届くんです。そこには「今月こんな作業をした」「草取りは

ないように思います。

写真を撮る場合、僕はよく考え十分に時間をかけます。いろいろなムードと美しさを大切に、これからもロマンチックの世界を発表していきたい。ですから、私の立場はピクトリアリズムです。フォトジャーナリズムの世界は比較的簡単に入り込みやすいが、必ずしも美しさを求めているわけではない。

たとえばNHKの「小さな旅」という番組はピクトリアリズムで、とても美しい。フィーリングがあります。

今橋 あれば、思わず郷愁に誘われる番組ですね。

ハイマス いいでしょう。フォトジャーナリズムのようなダイレクトな世界ではなく、僕はあくまでロマンチックに飾った世界を撮っていきたい。黒澤明監督の『乱』という映画は実に美しいロマンチックムにあふれ、ダイナミックで素晴らしい。僕のめざしているのは、それです。

ですから、『たんぼ』の写真は黒澤作品にくらべればまだ美しさに欠け、フォト

何回目」とか、「自然乾燥のため稲を掛けていたら、お父さんが腰を痛めて一カ月起きられません」とか、いろいろなことが書いてあります。

日本人は大体子どものときから「ご飯は一粒でも大事にきなさい」と言われて育てられるのですが、こうした話を聞くと、むしろ現代だからこそ、農家の相応な覚悟と労力の末に、おいしいお米が生まれてくるのだと実感しています。

ハイマスさんが美しいたんぼを撮影できるのも、もしかしたらあと十年とか二十年かもしれないですね。都会で仕事をしている者には実際は何の解決能力もありませんが、後継者問題は本当に考え直さなければならぬ問題ですね。

ハイマス 去年のような凶作は不慮の事故みたいで仕方ありませんし、コメ輸入の問題も政府の政策で対処できるでしょうが、後継者問題は実に難しいですね。松之山町のお年寄りの農民も、大変です。背中とか腰が痛いと言っていました。

今橋 ハイマスさんは、これからも日本各地の自然を撮っていかれるんでしょう

うか。『たんぼ、パート2』はお考えですか。

ハイマス パート2はちよつと難しいですね。松之山町といった小さな町のたんぼを撮るのなら、できますけどね。

今橋 ハイマスさんにとつての桃源郷ですね。

ハイマス とてもいいところですよ。四季の変化や人々の生活、空模様や雲海など、美しいものはたつぷりとあります。写真集は「小さなたんぼの村」とでも名付けましょうか。

今橋 いいですね。

ハイマス でも、実はこの町ではお年寄りの自殺が多いんです。山上の集落での生活ですから、近くに町はなく、だから遊びもありません。とつても素晴らしい場所ですが、死ぬまで暮らすとなると、ちよつと考えてしまいます。

今橋 そうですか……「桃源郷」にそういう厳しい現実があるとは……本当に言葉を失います。

ハイマス とはいえ松之山みたいなところに、たんぼが神聖な土地(Sacred)という。それを聞いたたえ子は、田舎で生れま育ったわけでもない自分がなぜここをなつかしいと思うのか、なぜ故郷だと直感するのか、その理由が初めてわかったと答えるのである。

対談を終えてジョニー・ハイマス氏の写真集『たんぼ』を再び見た時、私の頭の中にこのアニメの美しい一場面が、風のようにさつと流れこんできた。対談の中でハイマス氏は、自分のこの作品集はロマンチズムではなく、むしろあふれるような「ノスタルジア」に支えられていると繰り返し言われた。イギリスに生まれ育ち、三十数カ国を写真家として旅した後に行きついたのは、日本の「たんぼ」と、それをめぐる風景と四季だった。都会生まれのOLが、そしてイギリス人の写真家が、それぞれの作品の中で向かい合っていたのは、実は、自然と人間との接点に熟成した「原風景」に他ならなかったのだという思いを、私は今改めてかみしめている。

というのもハイマス氏の『たんぼ』

Field)として残っている気がします。十年間も、僕はこの村をガイドしてきました。ここに残っている日本人のスピリットとかフィリングが、好きだからです。チャンスがあれば、一度ぜひいらっしや

〈対談を終えて〉

宮崎駿アニメの秀作のひとつ、高畑勲脚本・監督による「おもひでぼろぼろ」(一九九一年の中に、忘れられない場面がある。主人公の岡島たえ子は都会生まれの都会育ち。田舎暮らしにずつと憧れていた彼女は、ようやくそのチャンスを得て山形へと旅立つ。年の離れた二人の姉とは違って内気で感じやすい、ちよつと甘えんぼの末っ子はOLとなった今、山形での「農業実習」の生活の中で、自分の現在と過去とが交錯する不思議な内面の旅を続けていく。彼女に思いを寄せる土地の青年トシオが、村を一望できる高台へと、たえ子を案内した折である。「やつぱり、田舎の景色はいいなあ」と

は、この二、三年日本を大きく揺り動かしたコメ問題と決して無縁ではなく、それだけにこの写真集があまりに「ピクトリアリズム」に傾いているのではないかと——との疑問を、氏にお会いするまで私は払うことができなかったからである。氏が本書の後書きに記すように「農村のひなびた美しさ、四季の魅力、一家の歴史、稲作文化という民族的遺産」をたんぼの景色を通して表現することが、本書のテーマである。山奥の田んぼを求めて道に迷い、ふと気づくと「原始的な力強さや生命力を漂わせる棚田」に囲まれたひなびた村、新潟県松之山町に居た——旧世界の Sacred Fields (神聖な土地) にタイム・スリップしたかのような体験を語るハイマス氏の文章は私たちに、泉鏡花の小説、そしてあの桃花源の風景を思いおこさせる。しかしこの風景とは裏腹に山積する現在の農業問題をどう考えれば良いのだろうか——。

ハイマス氏は、これらの写真を撮り続けるかたわら農家の方々と実際に語り合い、彼らが一様に老後の問題を抱え、何

って下さい。小さいけれど温泉もあります。目の前に広がるたんぼを見ながら、温泉に浸るのも何ともいえぬ気分です。(笑)

(一九九四年九月二七日収録)

今橋映子

感動するたえ子に、彼は「田舎の景色と言ったって、実はみんな百姓たちがつくってきたものなんです」と意外なことを語り始めるのである。——山奥の自然なみは別にして、田舎の森、林、小川は、枯木や落葉を拾い、きのこを採り、水路や山道を保全するのは、田んぼや畑をつくり守っていくのと同じ位大切な仕事だった。人間が自然と戦ったり、自然からの恵みもろう中から、うまいことできあがつてきたのがこの風景なんだ。いわば、「自然と人間の共同作業」が、田舎の自然を形造ってきたんだ——と、自らもウタインして有機米農業に取り組むトシオは

よりも後継者がいないという厳然たる現実に向き合っていることを知らされてきた。日本における「たんぼ」の喪失は稲作文化の消失のみならず、たんぼとそれを囲む、人間が愛し育てた「自然」や生態系の喪失に他ならない。一見桃源郷と見える山合いの村々が、同時に解決のつかない現実を抱えているのを承知しながら、写真家である氏は、失われゆく原風景を挽歌としてとどめておこうとするかにも見えた。

「おもひでぼろぼろ」の最後でたえ子はついに、自分の生まれ育った土地ではない田舎へ、農家の嫁として「帰る」決意をする。何たる時代錯誤で「甘ったれた」ストーリー設定との批評が、アニメ公開当時からあった。だが果たしてそう一方的に言い切ることができなのだろうか——。「おもひでぼろぼろ」同様、「たんぼ」が私たち現代人に呈する問題に、今沈黙をもつてしか答えられない状況の中に、真に考えるべき「現代の日本」が存在するように思う。